

未来へ

の伝承

第190回

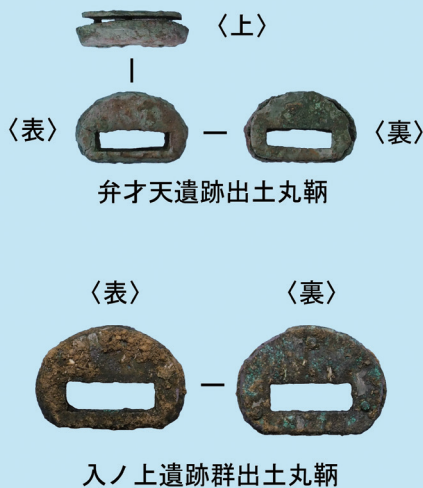
腰帯具ようたいぐ

—古代のベルト飾り—

腰帯具は、古代の官人(役人)が着用したベルトの飾りです。古代官人は正装の内容が身分に応じて定められており、ベルトもまた規定の対象でした。

親王や貴族、上級官人たちは金や銀の飾りで輝く「金銀装腰帯」を身に着けた一方、中・下級官人は、黒漆を塗った「烏油腰帯」の着用が定められていました。こうした規定を裏付けるような腰帯具が、全国の遺跡から出土しています。今回は、市内の遺跡から出土した腰帯具を紹介いたします。

左の写真は、入ノ上遺跡群(沖宿町)と弁才天遺跡(常名)から出土した「烏油腰帯」の腰帯具です。半円形を呈する製品で、丸鞆と呼ばれます。裏に薄い板を当ててベルトを挟みこみ、表の金具から伸びる鋲びょうを使って固定します。写真の資料はどちらも裏板まで残存しており、ベルトへの装着方法がよく分かります。



弁才天遺跡出土丸鞆

入ノ上遺跡群出土丸鞆

下の写真は、入ノ上遺跡群(沖宿町)と前神田遺跡(神立町)から出土した石製の腰帯具です。四角形を呈する製品で、巡方と呼ばれます。腰帯具の主な材質が銅から石へと変化した平安時代の製品で、どちらも中・下級官人が身に着けたものだと考えられます。前神田遺跡出土品は、白色の石材に黒色の漆を塗った「烏油腰帯」の腰帯具です。入ノ上遺跡群出土品は、表面が鏡のように光沢を放つほど入念に研磨された優品です。平安時代の中・下級官人は、黒色以外の腰帯具を身に着けることもあったと考えられています。

本来、一本の腰帯には複数の腰帯具が取り付けられますが、市内では単一の出土に限られます。これらの腰帯具は、官人の使用中に脱落したもの、使用後にベルトから取り外したものの、ベルトごと切り取ったものなどだったと考えられます。単一の腰帯具であっても、官人の持ち物であったことを背景に、権威の象徴と見なし、保有されたのかもしれない。このほかにも、地鎮に用いられた、修理や銅製品の原料に回されたなど、腰帯具が出土する背景にはさまざまな説があります。

紹介した市内出土腰帯具は、1月末まで上高津貝塚ふるさと歴史の広場に展示しています。ぜひご覧ください。

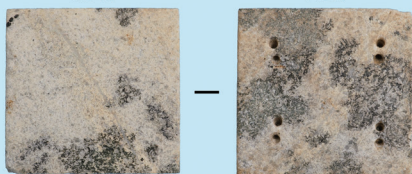
関上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎826・7111)

※腰帯具のイメージ図

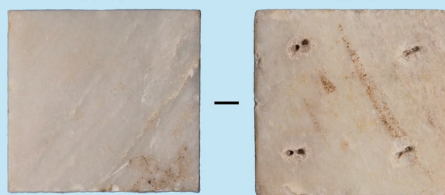


〈表〉 〈裏〉



前神田遺跡出土巡方

〈表〉 〈裏〉



入ノ上遺跡群出土巡方